

室 報



南相馬・鹿島地区 線量計

◀目 次▶

『祀部職掌類聚』の研究に関して ……	2
『大田原俊輔追悼記念国際シンポジウムおよび 発達障害公開講座』に参加して ……	4
多様性と分断からみるシカゴの過去と現在 …	6
福島県飯館村・南相馬市・浪江町 ……	9

2013年度 人権問題研究室合同合宿研究会 …	11
人権問題研究室研究学習会 ……	12
関西大学京都市民人権講座	
2013年度 人権問題研究室 国際ワークショップ	

『祀部職掌類聚』の研究に関して

吉田 徳夫

部落問題研究班では、部落問題の歴史研究を中心に文献史料調査を進めている。今夏は、東京の静嘉堂文庫を中心に、国立公文書館を回り、『祀部職掌類聚』と題する江戸時代の幕府史料を調べた。昨年は東京大学法学部内にある法制資料室を訪れ、関東大震災で焼失したとされる司法省から移管された江戸幕府の評定所関連の史料を調査した。この二つの調査は関連しており、これが江戸幕府評定所の史料であるという推定しながら、研究を行っている最中である。

この調査は、既に開始して数年を経過しているが、発端は兵庫県丹波篠山市にある青山文庫の調査から始まっている。同文庫内にある青山文庫に江戸幕府の評定所関係の史料から「美作改宗一件」と称する部落差別事件の判決史料が発見された。既にこの史料は小椋孝士氏が研究され、当該史料の紹介も人権問題研究室主催の公開講座で行われているが、昨年、その史料の全文翻刻が行われ、科学書院から刊行された。この事件は、美作地域の部落寺院の僧侶が幕府に訴訟を持ち込み、幕府は長年、それを放置していたが、急遽取り上げた事件である。当該寺院は今日も存在しているが、元は真言宗の本山を持たないが、江戸幕府の作成する『穢寺帳』には登記されている寺院で、キリシタン類族も檀家として抱える寺院であった。この寺院に対して、幕府は判決で、当該寺院のみならず近隣の部落寺院に対しても真言宗から本願寺への改宗命令を出した。当然、幕府は判決を下す前に本願寺に打診して、当該寺院の受け入れのための調整を行っている。まさに江戸幕府により仕組まれた改宗事件である。以後、本願寺史料研究所で調査をしていると、幕府は改宗を命令するが、これに対して不服従の部落門徒の存在が窺える。

今、部落問題研究班が取り組んでいるのは、この評定所史料の全容の解明であり、併せて、評定所の裁判に見える部落差別判決の発掘であ

る。評定所関係の史料は既に関東大震災の直前に三浦周行氏が「失われた近世史料」（『続法制史の研究』所収）として論文に書かれた。しかしその史料の筆写は急いで行われたため、読みにくい状態で京都大学法学内に所蔵されている。その史料は平松義郎氏の手により翻刻紹介されているが、依拠した史料の状態が悪いため、良質な文献に基づいて紹介の必要性があったが、今回、幸い東京静嘉堂や篠山青山文庫からその良質な史料が発見されたわけであり、部落問題班では継続して、東京や篠山市へ定期的に調査に訪れ、研究会も開催しながら、その資料群の解明をしている最中である。

静嘉堂文庫の内に『祀部職掌類聚』と題する文献群があり、この中には、宗教行政関係の史料と並んで、江戸幕府の評定所関係の史料がある。この静嘉堂文庫本には「高崎文庫」という蔵書印が押されており、篠山青山文庫本には「青山文庫」という蔵書印が押されている。これとは別系統の『祀部職掌類聚』が国立公文書館にも残っている。今回の調査は一人、部落問題だけでなく、江戸幕府中枢の評定所裁判の解明にも繋がる大きな研究となる。評定所が作成してきた文献としては、既に司法省所蔵『御仕置例類集』が刊行されているが、これは前例を項目毎に調べるために作成された評定所裁判を分断された状態で残り、その判決文全容は分からないままできた。また『御触書集成』が評定所で作成され、その翻刻も逐次行われているが、これも篠山市の青山文庫には司法省版とは異なる『御仕置例類集』と共に残っている。

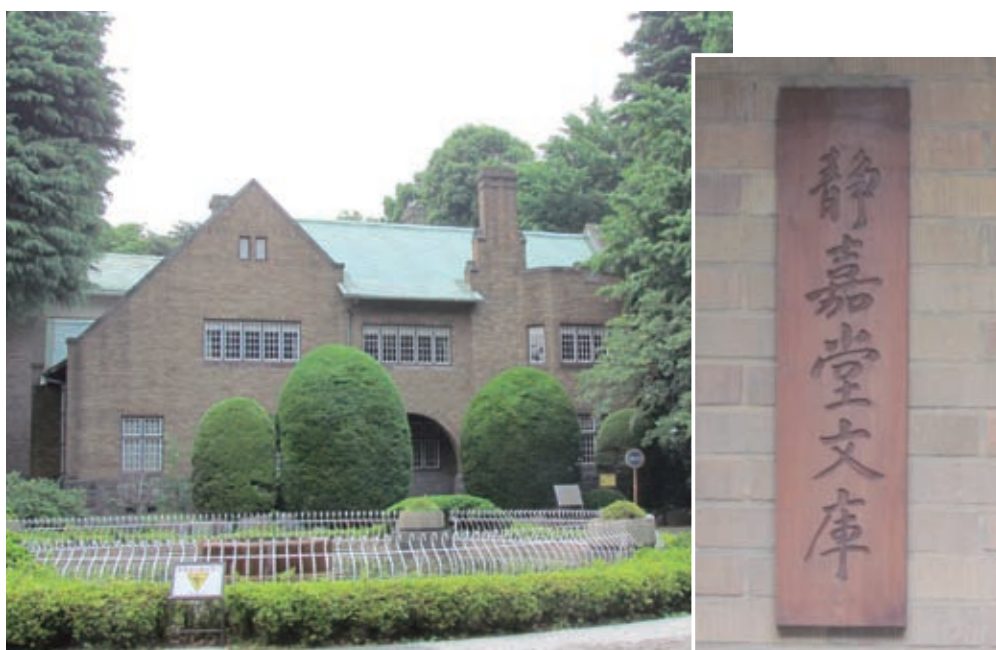
篠山の青山文庫と静嘉堂文庫の機関が、『祀部職掌類聚』と題する大部のコレクションが、所蔵されており、これが今まで研究上、看過されてきた史料である。恐らく、看過された理由は『祀部職掌類聚』という題名に原因がある。祀部とは、祭祀に関わる名称であり、宗教関係の史料と考えられ、重要視されなかったため

あろう。我々の宗教観念が様々に誤解を与える原因であった。勿論、このコレクションは評定所裁判の記録だけではなく、宗教行政関連の記録も当然、存在する。こうした宗教に対する無関心がこのコレクションが看過された理由と考えて間違いない。また静嘉堂には『祀部職掌類聚』と並んで『大坂都督所務類纂』と称する記録があり、篠山の青山家が大坂城代を勤めた寛

政年間の裁判史料が所蔵されている。既に指摘した『御仕置例類集』に収載されているものと時期的に重複する。

これまで評定所とならんで寺社奉行研究は頗る不振を極めたが、研究する材料が出そろってきた観がある。今後、可成り長期的な視野に立つて研究を推し進め、基礎的な史料調査と研究を行う予定である。

(法学部教授)



『大田原俊輔追悼記念国際シンポジウムおよび発達障害公開講座』に参加して

加戸 陽子

大田原症候群（大田原ら1976）は生後1か月以内に発症を認めるてんかん性脳症として岡山大学名誉教授大田原俊輔先生によって報告され、唯一日本人の名がつけられたてんかんである。大田原症候群はWest症候群、Lennox-Gastaut症候群とともに、乳幼児期に発症し経年的にこれらの3型の相互移行を認め、大田原先生によって年齢依存性てんかん性脳症という概念が提唱された（大田原1977）。年齢依存性てんかん性脳症はいずれも重篤な基礎疾患が存在し、ほぼ持続的なてんかん性脳波異常を有し、発作の抑制が極めて難しく予後不良な場合が多い（日本てんかん学会2006）。



在りし日のGastaut, HとOhtahara,S

大田原先生は岡山大学に全国でも数少ない小児の神経学を専門とする教室を創設され、常に先進的かつ広い視点で研究に臨まれ、脳波などの神経生理学的手法による小児の脳の発達とてんかんの研究や治療の普及とともに、種々の神経疾患や発達障害に関する研究についても精力的に体制を整えられ、臨床応用に向けた様々な基礎的知見の集積や病態解明に取り組まれてきた。また、インド、ロシア、ブラジル、台湾などでの若手研究者の育成という国際的な貢献もなされてきたという。そうした大田原先生のご功績は、日本てんかん協会木村太郎賞、国際てんかん連盟および国際てんかん協会The Award

of Ambassador for Epilepsy、国際小児神経学会Frank Ford賞、Hans Berger財団Hans Berger賞などの数々の受賞歴からも明らかである。

2013年3月16日に大田原先生が永眠された。しかし、大田原先生の薫陶を受けた方々が中心となって、2013年9月22日に岡山大学創立50周年記念館で『大田原俊輔追悼記念国際シンポジウムおよび発達障害公開講座』が開催された。てんかんおよび発達障害をテーマに、医療、教育、福祉などの多様な領域で活躍されている国内外の演者が招待された。海外からの演者は大田原先生が生前交流を深めてこられたゆかりの深い方々ばかりであるという。参加者は医師や看護師、教師、心理士など、280名を超える盛況なものであった。



大塚頌子名誉教授（シンポジウム実行委員長）による開会の挨拶

国際シンポジウムでは、てんかんをテーマとして、カナダ、ドイツ、アメリカ、イタリア、日本の各演者により、外科的治療の術前評価のために行われる3次元MRI画像による切除部位のより厳密な特定法や、脳波の高周波振動の解析による術前評価や診断法、難治性てんかんに対

する発作軽減のための経頭蓋直流電流刺激と迷走神経刺激療法を併用した非侵襲的治療法、発達期の脳における発作の影響などの研究動向が報告され、報告後は出席者との活発な質疑応答が続いた。



質疑応答中のSperner, J教授 (Child Neurology Service)



Holmes, G.L教授 (The University of Vermont) による話題提供



発達障害公開講座では、自閉症スペクトラムの新しい診断基準の概要と臨床特性のとらえ方、海外での認知特性にばらつきのある子どもの教育的支援に関する理念や教育課程の紹介と認知的個性を活かした教育的実践のあり方、発達障害をかかえる子どもの学習困難から生じる自己評価の低下に対する支援の視点、岡山県内各市における多職種間連携によるとりくみ、不登校問題改善に向けた地域ぐるみのかかわり、特別支援教育の充実に向けた高等学校モデル校でのとりくみなどが報告され、いずれも現在ニ-

ズの高まっている実践的な興味深い内容であった。

国内外から駆けつけた演者および多数の参加者によって、大田原先生が献身的にとりくまれてきた研究および臨床活動におけるご意志が受け継がれ、更に発展していくことに大きな期待が寄せられていることを肌で感じた一日であった。(文学部准教授)



松村暢隆教授 (関西大学) による講演



荻野竜也教授 (中国学園大学) による講演

大田原俊輔、石田喬士、岡鎧次、山藤康子、井上英雄 (1976) 特異な年齢依存性てんかん性脳症 The Early-Infantile Epileptic Encephalopathy with Suppression-Burstに関する研究, 脳と発達8, 270-280.

大田原俊輔 (1977) 年齢依存性てんかん性脳症に関する研究, 脳と発達9, 2-21.

日本てんかん学会 (2006) てんかん学用語事典、日本てんかん学会.

多様性と分断からみるシカゴの過去と現在

酒井 千絵

2012年9月から2013年3月までの半年間、私は大学から在外研修の機会をいただいて、家族と共にシカゴに滞在した。Second Cityの愛称で呼ばれるシカゴは、現在の人口規模では順位を1つ落として、NY、LAに次ぐ第3の都市である。

東海岸、西海岸の中心都市である2都市と比べ、中西部に位置するシカゴは日本から見ると印象が薄い。社会学を専門とする者としては、19世紀末設立のシカゴ大学社会学部を中心とする「シカゴ学派社会学」を忘れるわけにはいかない。1893年の万博前後から急速に発展した都市がかかえる貧困や人種問題、家族などの諸問題を、現場で「尻を汚して」調査したシカゴ学派の視点は、今も重要な意味を持つ。定量調査の理論や技術が発達し、社会調査の主流に変わるなか、インタビューや参与観察、手紙など多様なライフ・ドキュメントを活用した彼らの調査法には今も関心が集まっている。

短い滞在ではあったが、20世紀はじめのシカゴでなぜ社会学が新しい学問として発達したのか、人々が社会学に何を期待したのか、といった問題をいろいろと考えた半年間だった。

まず、個人的な経験からはじめたい。シカゴに半年間住む、と決めた私は、事前にシカゴに住む知人やインターネットの助けを借り、滞在計画を練った。訪問研究員として籍を置くシカゴ大学は、シカゴ南部（サウスサイド）ミシガン湖岸に近いハイドパークとよばれる区域にある。米企業で働く日本人家族を訪ねた時、シカゴ大学の周辺で家を探していると告げると、安全を考えたら、大学まで遠くても北部に住むべきだと反対された。彼女が代わりに質問を投稿してくれた在住日本人向けの掲示板にも、サウスサイドは絶対にやめるべきという回答が続き、さすがの自分も、これは考えが甘かったかと頭を抱えてしまった。

そこでシカゴ大学に留学している日本人研究者に大学近辺の環境を尋ねると、ハイドパーク

は、サウスサイドの「浮島」のような場所だと言う。彼女は世界各国からの研究者や留学生が集まる多様性に、むしろ暮らしやすさを感じていた。だが同時に、東西南北の道路を具体的に指定して、その中で家を探した方がいいとのアドバイスもくれた。結果的に私たちは、大学まで徒歩10分程度の地区にアパートを借りたのだが、この一連の「事件」は、シカゴという都市の特徴を考える重要なきっかけになった。

サウスサイドは危険だという在米日本人の忠告は、彼らの多くがサウスサイドに足を運ぶことはほとんどないとはいえ、決して誇張ではない。区域ごとに人種構成を色分けしたシカゴ市の地図を見ると、北部に白人、南部は黒人が住むという分離が明確なシカゴでは、治安、教育を始めとする住環境に大きな南北格差がある。ハイドパークから中心街や北部に行くには、まず湖岸を走るレイクショア・ドライブに出て、北上することが推奨されていた。そこには犯罪の多い地区を車で通って、故障でも起こしたら、事件に巻き込まれても不思議ではないという暗黙の了解がある。バスも地下鉄も、路線によっては危険な地区を通るので気をつけろ、と複数の人からアドバイスされた。大学が位置する「浮島」、ハイドパークの安全は、シカゴ市警察に加えて、シカゴ大学警察のパトロールで維持されていた。

シカゴ南部の出身で、高校卒業後に東部の有



大統領選挙の投票所。英語に加えスペイン語と中国語で表示されている

名大学を出て弁護士になったファーストレディのミシェル・オバマは、地域の公立校が事実上人種ごとに分断されている現状を打破するために作られたマグネット・スクールで、人種が混交する高校を卒業している。つまり分離を越える社会的流動性がないわけではないが、その機会は決して均等ではない。たとえば年間500名以上が、銃で命を落とすシカゴで、事件の発生は南部に集中している。今年1月にも、大統領の就任式に出席した高校生の女の子が、数日後に日中銃で撃ち殺されるという痛ましい事件があった。現場は地図で見ると私たちのアパートから2kmに満たない。葬儀にも参加したミシェル・オバマは、その後「彼女は私であったかもしれないし、私が彼女だったかもしれない」とスピーチして、銃規制を訴えた。その一方で全米でも有数の名門シカゴ大学は、同じ南部に位置するにもかかわらず、学生や教員には白人が多い。

シカゴの多様性は、19世紀後半から20世紀初めに進んだ、アメリカ内外からの人口流入にはじまる。ポーランドやイタリア、南部から移住したアフリカ系などの新来者は、従来のイギリス等にルーツを持つ人々とは異なる、新しい文化をシカゴに持ち込んだ。また、様々な産業が発達して労働の場が増大したため、若い単身者が流入し、家族や結婚の価値観も変化した。1900年の発売当初は不道德な内容と非難されて殆ど売れず、その後復刊してベストセラーとなったシオドア・ドレイザーの『シスター・キャリー』は、ウィスコンシンから姉を頼ってシカゴにやってきた若い女性を通して、都市の変容を描いた小説である。さらびやかな大都市シカゴで刺激される消費欲、豊かな生活をほのめかす男性からの誘惑は、姉夫婦の節約した生活や彼らに下宿代を払うとほとんど残らない女工のわずかな収入と対照をなす。ここで描かれるのは、現代にも通じる都市の消費生活である。

100年近くを経た現在のシカゴも、やはり区域による都市の分断が著しい。区域ごとの人種の割合を地図上に落とすと、1920年頃からアフリカ系が移住した南部の区域はブロンズヴィルと呼ばれ、居住者の9割をアフリカ系が占めた。1960年代以降、アフリカ系が占有する地域が南部全体に拡大していくが、北部は依然として白人が多数を占めてきた。その後メキシコなどか

らのヒスパニック、中国・韓国からのアジア系が多数を占める区域が登場し、階層上昇したアフリカ系アメリカ人の一部が北部に転居するなどして、徐々に人種の混交は進んでいる。また、リンカーンとフレデリック・ダグラスという奴隷制廃止に尽力した2人の誕生日がある2月は、アフリカン・アメリカン歴史月間に制定されている。小学校でも子どもたちが、アメリカの歴史に名を残すアフリカ系の著名人を取りあげてリポートするなど、多文化主義的な教育も行われている。しかし、人種と経済階層が強く結びつくシカゴの社会的分離自体は、先に述べたとおり、あまり改善しているようには見えない。

私がシカゴに滞在した2012年から2013年は、公立学校をめぐる改革と抵抗の年であった。9月に子どもを地元の公立小学校に通わせはじめのやいなや、シカゴ市では25年ぶりの教員ストライキがはじまり、学校は1週間あまり休みになってしまった。このストライキは、市の教育委員会による、統一テストの成績による教員の評価や、市の方針に対立的との理由で解雇された教員の復職などを求めたものだった。教員のストライキは日本ではまれだが、教員の主張に共感する父母や地域の人々は家の前に、"We Support Teachers"のプラカードをあげ、学校に行けないために居場所のない子どもたちの受け皿として、公園やコミュニティセンターで、アートプロジェクトや有料の教室などを開いて、ストライキを支えた。

しかし学校は、貧困層の子どもたちにとって、市のサポートで朝と昼の食事の機会を提供する場所であり、親が働いている間の預かり場所でもある。応急措置として、いくつかの学校が、朝昼の食事を希望者に配布するために開かれた。また教員組合の主張に批判的なメディアは、「子どもたちが学校に行けないのは困る」、「早く学校に行きたい」と述べる親子の姿を毎日のように報道し、学校改革をめぐる対立を強調した。富裕層は環境の良い私立学校に通うアメリカで、地域の子どものを受け入れるべき公立学校が効率性を重視し始めると、教育を受けるという基本的な権利が侵害されてしまう。3月には50校あまりの公立学校が閉鎖され、一部は市場原理に基づくチャーター・スクールに置き換え

られた。シカゴ市の公立学校は生徒の人種構成をすべて公開しているが、南部では90%以上の生徒がアフリカ系であり、給食費用の補助を受けている貧困層が多く、統一テストの平均成績も低い。学校がうまく機能していないとして閉鎖された学校が、南部の貧困地域に偏っていたことも、大きな問題となった。

日本でも今春公開予定の『それでも夜は明ける』（Steve McQueen監督、2013年）は、19世紀半ばに、既に奴隷制を廃止していた東部でミュージシャンとして働いていた黒人男性が、出張中に拉致されて南部のプランテーションで奴隷として過ごした12年間を描いた回顧録を基にした映画であり、アメリカで好評を博している。この映画について、『ブラック・アトランティック』のポール・ギルロイは、奴隷制が過去のものと考えられ、個人の成功は、その努力や実績によるという新自由主義が支配的な現在、この映画が、「人種主義が消え去るところか、ポスト人種主義と呼ばれる現代社会において、今も生き延び影響力を持っていることを明らかにして

いる」と述べている（Guardian紙、2013年11月10日）。監督本人も、ラジオのインタビューでアフリカ系コミュニティに貧困や精神疾患、教育崩壊が集中することを現代の奴隷制と語っていた。150年以上昔を舞台にしながら、人種や生まれた地域によって分断される現在のシカゴにも通じる現実を描き出している点が、この映画が評価される理由なのだろう。

シカゴは、19世紀以降この町を目指してやってきた多様で自由な市民によって形作られた都市である。ジャズやブルース、様々なエスニック・タウンは、今もシカゴの町に遺産として受け継がれる。しかし、住む地域によって教育の権利だけでなく、生きる権利すらも脅かされる現実、人々の生活に暗い影を落としている。教育や格差拡大などの問題はシカゴやアメリカに限った問題ではない。現在の日本に住む私たちも、シカゴの経験を通して、共有する問題に立ち向かってゆくことができるのではないかと感じた。

（社会学部 准教授）



シカゴの小学校の
アフリカン・アメリカン・ヒストリー・マンスにて



福島県飯館村・南相馬市・浪江町

住田 一郎

夜7時過ぎ、私たちを乗せたマイクロバスは南相馬市をめざして県道12号線を走っていた。川俣町を過ぎると道路の両側に軒を連ねた家々から、明かりが消えている。真っ暗闇。何とも奇妙な光景に出くわした。なぜ明かりがないのだろうといぶかしく思っていると、案内人から「ここは飯館村であり、放射能による汚染度がいまも高く、昼間にかぎって自分たちの家への出入りが認められているが、夜間は禁止されている。住民が住めないの、夜間にふつうに見られる家々からの光が見えないのです」との説明を受けた。飯館村は福島原発から北西方向に30km以上離れているにもかかわらず、放射能汚染量は高かった。水素爆発を繰り返した原発からの放射能汚染飛沫が北西にむかう風に乗って大量に降り注いだからである。アメリカ軍はいち早く放射能飛沫が飯館村方向に向かっているとSPEEDI（緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム）で捉えていた。この情報入手していたにもかかわらず、日本政府はすぐに地元自治体や住民に知らせなかったため、多くの住民は30km圏外を目指し、避難地として飯館村方向を選んだ。南相馬市の人々が着のみ着のまま避難した中学校体育館の避難所に米軍から、「ここは放射能汚染が最も危険なところだ。すぐに他の場所に避難しなさい」と伝えられ、避難民はパニックに陥ったという。

ゴーストタウン化した飯館村を通過した私たちは、震災・原発事故後2年7ヶ月も経過しているのに、とこれから向かう南相馬市や浪江町の状況の深刻さを想像せずにはいられなかった。

南相馬市の鹿島地区に、私たちを受け入れてくれた天理教教会がある。教会横の公園には、放射線量を測定する線量計が設置されている。朝早く、美しい朝焼け空に見とれながら真野川堤防を散歩し、行きかう人たちがあいさつを交わす日常からは、放射能汚染など別世界の出来事のように思える。しかし、初めて見る線量計

の前に立つと現実に戻される。少し高めの線量0.141マイクロシーベルトは、昨日からの雨が木々に付着した放射能飛沫や空気中の放射能飛沫を地上に洗い流したからだそうだ。南相馬市は福島原発から20km圏内に位置する小高区、圏外の原町区、鹿島区の三つに区分されている。仮設住宅は3312戸、借り上げ住宅は5087戸であり、仮設住宅は原町区と鹿島区に建設され、入居者の多くは高濃度の放射能汚染にみまわれ、警戒区域から避難指示解除準備区域（2012.4.16～）に指定された小高区からの避難者である。

午前中のボランティア先として、私たちは地元の社会福祉協議会から原町地区の仮設住宅を指定された。仮設住宅の集会所で毎月一回開催されている住民のための健康検査とサロンに参加させてもらった。簡単な検査後に、ギター演奏を披露し、唱歌等を一緒に歌い、打ち解けた頃、被災時の様子や仮設での生活などを参加者から聞かせてもらった。仮設住宅に住む住民の多くは高齢者で、息子や娘の家族はほとんど他府県に避難して暮らしている。孫たちに会えないのはさびしいが、仕方がないね、と自分の気持ちを無理やり納得させているようだった。私が話を聞かせてもらった70代のご夫婦も、二人の子どもたちは仙台で暮らしており、今は仮設で二人暮らしだった。私の方から、お話を聞くために、震災後の宮城県や岩手県でのボランティア活動、それに現地の被災状況等について話したが、「でもねえ、あちらとこちらでは全然違うよ。こちらは、震災、津波それに原発事故だもの、私らが住んでいた小高区にはこれから先いつ帰れるか、わかんねえだから。」となんども、ひかえめながら反論された。決して、他県の被害が軽いといっているわけではない。家族が完全にばらばらにされたうえ、いつ元に戻れるのか、との見通しもまったく立っていないことへの焦燥感からであったのだろう。私はこれまで何度か仮設住宅で被災された高齢者の方々と交流し

てきた。被災者自身が手作りの漬物や干物を持参してくれた、その気くばりにホッとする思いを抱いた。今回も、仮設の住人から手作りの草餅の差し入れがあった。10時から始まるサロンに間に合わせるために、いったい何時から作り始めたのだろうか、私は胸を熱くした。

彼らの気くばりに接し、また今の思いを聞かせてもらおう一方で、私たちボランティアにいかほどのことができるのだろうか、気持ちが落ち込んでしまう。震災直後から現地でボランティアのコーディネイトをされている『JoyousLife猪苗代』代表齊藤容久氏は「仮設住宅で生活している高齢者は『世間の人たちは自分たちのことをもう忘れてしまっているのでは』との不安を抱えている、どのような形であれ仮設を訪れてくれるボランティアは大歓迎なんです。」と話されていた。

午後からは、鹿島区の天理教教会に震災後東京から住民票を移してボランティア活動に従事する教会責任者に同行（南相馬市民しか入れない）していただき、二ヶ月前までは立ち入りが全面禁止されていた浪江町に入った。海岸近くの請戸小学校を中心にした町並みは家屋のコンクリートの基礎を残しただけで完全に跡形もなくなっていた。一昨年訪れた名取川右岸の閑上地区の、農地に放置されたままの船舶や瓦礫と同じ惨状であった。違うのは原発事故による放射能汚染によって立ち入りが禁止されたため、惨状の傷痕は一面のセイタカアワダチソウに覆われ、二年七ヶ月の時間だけがそこに残されていた。町はほとんど手つかずのまま放置され、崩壊し押し流された周囲の中に、かろうじて残った請戸小学校の校舎と体育館がぽつんとその残骸をさらしていた。



全員が避難できた請戸小学校

海岸から数十メートルに位置する請戸集会所も内部は完全に津波に流されていた、二階のベランダからは10km先の福島原発の煙突がはっきり見える。集会所横に設置された線量計の数値は0.068マイクロシーベルトで、20km以上も離れている鹿島区のそれよりも大きく下回っている。なぜ、一見逆現象のような数値になるのか。齊藤さんはレクチャーで、「放射線汚染した飛沫は上空を風に乗って原発から北西の方向に流され、その方向の低地や山地に降り注いだ。30km以上も離れている飯館村が高濃度の放射線に侵されているのはそのためである。山地や低地の放射能汚染を除染することは非常に困難である。除染後の廃棄水や物の置場すら完全には確保されていない。その地域の避難者は先の見えない生活を強いられているが、いまだに、避難地域内の農地や家屋の補償金額すら決まっていない。仮設住宅入居者には様々な支援物資が届いているが、借り上げ住宅や県外避難者への支援はほとんどとられていない。」と山積みされた課題について語ってくれた。

2020年オリンピック開催が東京に決定する際に、安倍首相は、「福島原発事故は完全にコントロールされている」と大見得を切った。しかし、遅々として進まない震災復興、収束できない原発事故処理を前にして、私たちはどのように応えればいいのか。「この先我々はどうなるのか、見捨てられるのでは」、抑えた現地の声のむこうに、私たちは「彼らの真の怒り」を聞き取らねばならないのではないか。

（委嘱研究員）

2013年度 人権問題研究室合同合宿研究会

吉田 徳夫

人権問題研究室では毎年、夏季合宿を各研究班順繰りで主宰して開催してきた。今年度は9月14日(土)から15日(日)にかけて、関西大学の六甲山荘で行った。参加者は外部から講師2名、研究員9名事務局1名を含めて計12名で開いた。外部からの講師は大阪大学大学院人間科学研究科准教授の高田一宏先生と、東京人権資料館長の本田豊氏である。

高田一宏先生からは、箕面市内の部落内でNPO法人を立ち上げられて、子どもの低学力克服の課題に取り組まれている報告であった。低学力問題は永年にわたり、取り分け義務制の学校において取り組まれている課題である。今までは、低学力問題は、部落、在日外国人に共通する問題であったが、最近ではその裾の広がりが、通常の日本人の貧困家庭を多く抱える地域の問題として見られる。格差論で言えば、貧困問題を軸に低学力問題は性格が異なりつつある。また、中途退学問題が高等学校以上の学校では深刻であり、大阪府の毎年の中退者だけで一つ

の学校の生徒の人員が消えている状態である。

本田豊氏からは、今日的な関心から関東地方における人権問題を取り上げられた。最近の東日本大震災や福島原発事故問題と関東地方との関連を取り上げられ、茨城県では、報道も行われない現地の情報が報告された。

福島原発の事故問題は、取り分け深刻な問題であり、事故直後から始まったメルトダウン隠し、以後継続的に発生している漏水事故問題等が指摘され、その対策が場当たりので、対策らしきものがない。また原発所長が既に「病死」と報道が行われたが、その事故との因果関係を指摘するマスコミも見あたらない。原発再稼働の前に議論すべき問題は多い。まして福島県内の住民が避難して他府県に居住する問題の解決策も何ら具体性がない報道が時折見られる。当然、帰還できる状態に回復させることが課題とはいいながらも、その帰還時期は今後、数十年先になるであろう。その期間内に解決すべき問題の検討は如何に施されているのであろうか。

(法学部教授)



人権問題研究室研究学習会 (2013年4月～2014年1月)

日 程	テーマ	講 師	会 場
4月12日(金)	マンガとジェンダー 「戦争」はどう描かれてきたか	守 如子 (社会学部准教授)	人権問題 研 究 室
5月10日(金)	アメリカにおける社会格差と子どもの教育	加藤 承彦 (広島大学大学院医歯薬学総合研究科 公衆衛生学研究室・特任助教)	
6月14日(金)	ホームレスから社会的困窮者へ ～釜ヶ崎支援の変容と新たな課題	川浪 剛 (真宗大谷派南溟寺僧侶)	
7月12日(金)	被差別部落民の当事者責任について	住田 一郎(委嘱研究員)	
10月11日(金)	教科書が表現する 歴史認識の過去・現在・未来	岡本 智周 (筑波大学教育学領域准教授)	
11月8日(金)	ケアワーカーは専門職になれるのか？ —介助・介護労働者の労働条件とキャリア形成から考える—	澤田 有希子 (人間健康学部助教)	
12月6日(金)	公立学校教員と国籍	広瀬 義徳(文学部准教授)	
1月10日(金)	～「であい・つながり・げんき」 になろう！～	中嶋 三四郎 (箕面市議会議員・北芝まちづくり協議会事務局長)	

関西大学京都市民人権講座

開 催 日	テ ー マ	講 師	会 場
12月5日(木)	平成25年度 京都市 「和い輪い人権ワークショップ」 第1回 身近な障害者 —当たり前な生活を振り返る—	倉田 純一 (システム理工学部准教授) 梅 紀久代 (プチハウスなな代表、 NPO法人サン・クラブ理事長)	京都府立総合 社会福祉会館 ハートピア京都 第5会議室

2013年度 人権問題研究室 国際ワークショップ

開 催 日	テ ー マ	講 師	会 場
11月16日(土)	「ジェンダーで読み解く戦争」から 「グローバル化時代を生きる青少年の 歴史認識」の読み解きへ	杉谷 眞佐子 (関西大学名誉教授・ 元人権問題研究室研究員)	関西大学 千里山キャンパス 第1学舎 1号館 A301教室
	「戦争を伝える」歴史教育の実際 —新たな可能性を求めて—	金田 修治 (大阪府高等学校社会(地歴・公民) 科研究会副理事長)	
	「ドイツの歴史教育学の基本的特徴 —“知識”と歴史的判断力の育成”をめぐる—」	マルティン・リーパッハ (フロッツ・パウアー研究所ユダヤ博物館教育部門長)	

編集後記

今号も各研究員から、それぞれ充実した内容の文を寄稿していただいた。加戸研究員からははてんかん及び発達障害に関する国際シンポジウム参加報告、住田研究員からは原発事故被災地域の現地レポートを寄せていただいた。酒井研究員のレポートは、シカゴにおける人種と経済階層が結びついて現れた社会的分離の現状を詳細に報告している。現代アメリカ社会の一断面を実体験に基づいて鮮明に描き上げており、実に興味深

い。吉田研究員は部落問題研究班で取り組んでいる歴史的研究の要旨を報告しており、今後の更なる研究成果が期待される。(熊谷 明泰)

関西大学人権問題研究室室報 第52号
2014年2月10日発行
発行／関西大学人権問題研究室
〒564-8680 吹田市山手町3丁目3番35号
電 話 (06) 6368-1182
FAX (06) 6368-0081
<http://www.kansai-u.ac.jp/hrs>